LC
りぽーと
Vol. 28

〒663-8558　西宮市池開町6-46
武庫川女子大学言語文化研究所
TEL　0798(45)3536
FAX　0798(45)3574
http://www.mukogawa-u.ac.jp/~ILC

「食べ物」ことばの年代差

【言語文化セミナー】　2008年12月8日（月）午後2時50分から4時20分

第17回「言語文化セミナー」を2008年12月８日（月）に開催しました。

講師は、ＮＨＫ放送文化研究所研究員の塩田雄大氏で、「ことばの地域差・年代差―食べ物のことばを中心に―」というタイトルでお話しくださいました。

食べ物のことばには、東日本と西日本とで、また年代によってその呼び名が異なるものがいくつかあります。塩田氏は、さまざまな調査結果をもとに、食べ物のことばには、どのような地域差・年代差があるのか、また、なぜそのような差が生まれたのかのなぞに迫って話されました。「肉」と言えば、西日本では「牛肉」、東日本では「豚肉」のことを指すのですが、そればなぜなのか。「焼きめし」と言うか「チャーハン」と言うか。「豚まん」と言うか「肉まん」と言うか。あるいは、「天かす」と「揚げ玉」どちらを使うかなど、食べ物のことばの地域差と年代差とについて、その調査結果を日本地図上に示しながら説明されました。

たとえば、ご飯を炒めて味付けしたものを、西日本では「焼きめし」、東日本では「チャーハン」と呼ぶ人が多いという結果については、次のような根拠を示されました。

東日本では、「焼きめし」は「焼きおにぎり」のことを伝統的に指しているため、ごはんを炒めたものを「焼きめし」と呼ぶと、「焼きおにぎり」との区別がつかなくなる。そこで、「チャーハン」という語が日本に入ってきたときに、「焼きめし」と混同しないように「チャーハン」を取り入れた、というわけです。

また、西日本で「天かす」、東日本で「揚げ玉」と呼ぶものがあります。西日本の飲食店では、「天かす」はテーブルに置いてある場合もあり、基本的に無料ですが、東日本では、トッピングとして有料なのだそうです。その有料のものを「カス」と呼ぶのはいかがなものか、という意識が東日本の人たちにはあるのではないかという見解でした。ただ、最近では、東日本でも若い世代の人たちに「天かす」派が増えてきているらしいのです。つまり、西日本化しているということです。これについては、東日本に「大阪風お好み焼き」の店や「さぬきうどん」の店が進出し、それらの店で「天かす」が使われているからではないか、ということでした。

さて、研究所では、セミナー開催に先立って、当大学の学生とＬＣ倶楽部会員[1]の方を対象に、食べ物のことばについてアンケート調査を行いました。以下、結果の一部を報告します。

【調査内容】

《調査対象者》 本　学　学　生　124名（有効回答数123名）
ＬＣ倶楽部会員　158名（有効回答数156名）
（20歳代～ 30歳代：30名、40歳代～ 50歳代：66名、60歳代以上：60名）

《調 査 方 法》 本学学生は、授業時間を利用してその場で回答してもらい、回収した。
ＬＣ倶楽部会員（以下、ＬＣ）には、アンケート用紙を郵送し、記入の上、郵便で返送してもらう郵送調査を行った。
異なる呼び名をもつ食べ物について、おもにどの言い方をするか、当てはまるものに○をつけてもらう。本学学生に対しては、現在の言い方、ＬＣには、子どものころの言い方と現在の言い方の２通りを回答してもらった。

◆調査結果　タイプ１ー時間による変化がうかがえるもの

①「ちらしずし」・「ごもくずし」

	ＬＣ20 ～ 30（30名）		ＬＣ40 ～ 50（66名）		ＬＣ60 ～（60名）		学生（123名）
	子どものころ	現在	子どものころ	現在	子どものころ	現在	
ちらしずし	24	27	38	58	24	54	117
ごもくずし	1	0	8	0	20	2	1

ＬＣも学生も「ちらしずし」と回答した人の方が多い。しかし、ＬＣの40歳代～ 50歳代と60歳以上では、子どものころには「ごもくずし」を使っていたが、現在は「ちらしずし」へと変化した人が何人かいることが見てとれる。かつて「ごもくずし」と言っていた人は、40歳代～ 50歳代では８人→０人へ、60歳以上の人は、20人→２人に減少している。ＬＣ20歳代～ 30歳代と学生は、「ちらしずし」を使うと回答した人がほとんどである。

これらの結果から、現在は「ごもくずし」よりも「ちらしずし」の方がより一般的に使われており、このまま進めば、将来は「ちらしずし」だけが使われるようになるのではないかと予想される。

1）ＬＣ倶楽部：一般の方々とことばを通して交流をはかる場。会員には刊行物の送付やセミナー開催のお知らせなどをしている。現在、会費無料、会員数135名。

②「ゆでたまご」・「にぬき」

	ＬＣ20～30（30名）		ＬＣ40～50（66名）		ＬＣ60～（60名）		学生（123名）
	子どものころ	現在	子どものころ	現在	子どものころ	現在	
ゆでたまご	23	27	48	63	37	54	120
に ぬ き	6	2	13	0	19	4	0

「ゆでたまご」と言うか「にぬき」と言うかという質問である。「にぬき」は「煮抜き」と表記し、十分に煮るという意味からきており、主に関西地方で使われることばである。ＬＣの「子どものころ」と「現在」の結果を見てみると、それぞれ、６人→２人、13人→０人、19人→４人と、すべての年代で「にぬき」を使う人が減少している。「にぬき」を使う学生は０人である。

「ＬＣりぽーと」第24号（2007年２月発行）では、「消える？残る？関西のことば」と題して、関西独特のことばや表現をいくつか取り上げ、それらが、将来、消えるか、あるいは残るかという予測をアンケート調査にもとづいて報告した。そこでは関西圏における「にぬき」から「ゆでたまご」への変化を指摘し、「にぬき」は将来消えていくことばの一つであろうと予測した。

今回の調査においても、「にぬき」から「ゆでたまご」への変化が見てとれ、同様の結果が確認できた。

③「ゴボウ」・「ゴンボ」

	ＬＣ20～30（30名）		ＬＣ40～50（66名）		ＬＣ60～（60名）		学生（123名）
	子どものころ	現在	子どものころ	現在	子どものころ	現在	
ゴボウ	28	30	45	64	27	55	119
ゴンボ	2	0	20	2	31	4	2

ＬＣで、子どものころも現在も「ゴンボ」と言う人は、それぞれ２人→０人、20人→２人、31人→４人と減っている。特に60歳以上の人では、子どものころ「ゴボウ」と言っていた人は27人、「ゴンボ」と言っていた人は31人と、「ゴボウ」より「ゴンボ」の方が多い。それが、現在では、「ゴボウ」55人、「ゴンボ」４人となっている。

「ゴボウ」と「ゴンボ」も、先に示した２項目と同じような変化が見てとれる。「ゴンボ」は次第に使われなくなっていくことばだと言えよう。

④「おでん」・「かんとだき」

	ＬＣ20～30（30名）		ＬＣ40～50（66名）		ＬＣ60～（60名）		学生（123名）
	子どものころ	現在	子どものころ	現在	子どものころ	現在	
お で ん	26	28	34	58	27	55	115
かんとだき	4	1	29	3	30	4	5

「かんとだき」は主に関西圏で使わる言い方で「おでん」を意味する。学生のほとんどは、「おでん」を使っている。ＬＣでは、40歳代～ 50歳代、60歳以上で、子どものころと現在の言い方に大きな変化が認められる。「かんとだき」と回答した人は、40歳代～ 50歳代で、29人→３人、60歳以上で、30人→４人に減っている。中高年齢層でも、いまや「かんとだき」ではなく、「おでん」と言っているのである。「かんとだき」も、関西方言の絶滅危惧種のリストに入りそうだ。

◆調査結果　タイプ２－年代による差があり、今後変化すると予測するもの

「カブ」・「カブラ」

	ＬＣ20 ～ 30（30名）		ＬＣ40 ～ 50（66名）		ＬＣ60 ～（60名）		学生（123名）
	子どものころ	現在	子どものころ	現在	子どものころ	現在	
カ　ブ	20	18	27	27	17	17	98
カブラ	10	12	36	36	42	43	17

学生は、「カブ」98名、「カブラ」17名という結果であり、大半が「カブ」を使っている。ＬＣの子どものころと現在の言い方とを見てみると、20歳代～ 30歳代「カブ」20人→18人、「カブラ」10人→12人、40歳代～50歳代「カブ」27人→28人、「カブラ」36人→36人、60歳以上「カブ」17人→17人、「カブラ」42人→43人という結果であり、どの年代も、子どものころの言い方と現在の言い方にほぼ変化がない。また、40歳代～ 50歳代と60歳以上では、「カブ」より「カブラ」と言う人の方が多い。

これらの結果は、①②③④に示したものと、ややタイプが違う。つまり、「カブ」と「カブラ」については、年代による言い方の違いは認められるが、①～④で見てきたような中高年齢層での変化が認められないのである。しかし、20歳前後の大学生たちは、圧倒的に「カブ」を使っている。これをどう考えるか。

中高年齢層の変化がない理由として、一つには、「カブ」と「カブラ」とは音が一つ違うだけで、「ゆでたまご」と「にぬき」のように似ても似つかないということがない。また、「ゴンボ」のように、古くささを感じさせるものでもない。そのため、呼び方自体も変化しないのではないか、という考え方ができる。一方、大学生たちは、小学校１年生の国語教科で『おおきなかぶ』をほぼ例外なく学習したと思われる。その結果、「カブラ」よりもまず「カブ」が最初にインプットされ、なじみがあるのではないかというものである。

世代による違いはあるが、現在、「カブ」と「カブラ」は共存している。しかし、今の大学生たちが親世代になり、その子どもたちが大人になるころには、「カブラ」を使う人は少なくなるのではないかと予測するのである。

◎アンケートにご協力くださったＬＣ倶楽部会員の皆さんと学生さんたちに御礼申し上げます。

担当：佐竹秀雄・岸本千秋　作業協力者：島崎泰子　2009年１月